

肩関節のリハビリテーションは難しい。夜寝ていると起きたくないような痛み、投球という高速の全身の協調運動中に生じる痛みや原因がよくわからない可動域制限、いずれも日常臨床でよく遭遇し、臨床医や理学療法士、作業療法士の悩みの種となる。「なぜ？ 痛いのか？」「なぜ？ 挙がらないのか？」このような臨床的な問題に、30年以上、悩みながら臨床・研究を追究してきた井樋栄二先生の歩みが詰まっているのが、この『肩学—臨床の「なぜ」とその追究』である。自分自身の臨床での悩みを思い出しながらページをめくると、自身の忘れていた知識や思いもよらなかった知見に出会う。肩だけではなく全身を専門とする理学療法士の臨床の「なぜ？」に向き合い、より良い治療を生み出したいと願う研究者として、本書の特徴を紹介させていただきたい。

「はじめに」では、井樋先生の肩学にかかわる歩みがまとめられている。リハビリテーションに関しては、上腕二頭筋長頭の機能や脱臼後の外旋位固定といった今では多くの人が知っているメカニズムや固定方法を井樋先生が生み出されたことと、そこに至る歩みを知ることができる。これは研究者として大変興味がそそられる内容であった。これまで当たり前に行われてきた内旋位固定をどうして外旋位で固定しようと考え始めたのか？ これは新たな治療を生み出すために必要なエッセンスを感じることができた。

第1章「肩関節の診察」では、理学所見の取り方や異常所見のわかる写真が多く掲載されている。理

学所見を取る際の写真やイラストはたいい地味でオリジナリティーが出にくい。しかし、本書の写真には実際に診療場面で撮られた写真が多数使われており、臨床での丁寧な診察の様子が伝わってくる。日々の臨床に真摯に向き合ってきたからこそ、わかりやすい所見の写真が残っているのであろう。学問としての肩を追究する前に、臨床に向き合う姿勢が垣間見え、常に臨床の「なぜ？」を追究してきた著者の根幹を感じることができる。

圧巻は第2章と3章である。肩の代表的疾患である、腱板断裂、肩関節不安定症、凍結肩、上腕二頭筋長頭腱炎・断裂、投球障害肩について、100ページに及んで、これまでの治療の変遷と最新理論が記載されている。病態の解釈が研究によってどう変遷したのかが理解でき、「なぜ？」「どうして？」に迫ることで、How to（実際の手術での工夫）が見えてくる。新たな治療が病態解釈によって生まれてきたことが如実に伝わる。How toは大事だが、学問としての王道を極めてきた著者にしか書けないものであろう。

日々の臨床に向き合うことで生まれる「なぜ？」と向き合い、徹底的に調べる。この積み重ねが、新たな治療やより良い治療を生み出す研究の第一歩であろう。本書にはその足跡が詰まっている。肩だけではなく、さまざまな関節や疾患に立ち向かう臨床家や研究者にとって、自分たちの向かう方向性を示す指南書ともいえる一冊である。

（B5 頁200 2021年 本体9,000円＋税[ISBN978-4-260-04354-0] 医学書院刊）